

序にかえて

博物館事務長 熊 野 正 也

この数年間は、夏休みを利用して旅の仲間と共に、ヨーロッパを中心とした各国の古代遺跡や博物館、美術館を巡ることにしている。このような旅をしていてまず驚かされることは、日本とは異なり、いろいろな遺跡の遺構が石造りのために大半のものが残存し、その全体像がよく理解しやすいということである。一目瞭然で、いわば野外博物館的な色彩を帯びていて見学者は跡も絶たないという有り様である。また、博物館や美術館にしても、人工照明等によって、単にきれいに見せようとする展示ではなく、博物館の原点ともいえる実物資料重点主義の展示という方針を貫いているということである。さすがは伝統を重んずるヨーロッパならばでという印象をもった次第である。

さて、今年の2001年は、小さい時からの夢であり憧れでもあったエジプトへでかけることになった。なんどもエジプトに関する本や写真集等でお目にかかっているギザ市のピラミッドやアブシンベルのラムセスⅡ世および王妃ネフェルタリの大小の神殿、そしてルクソールの大神殿などをこの目で確かめることができると思うと、出発まで心が躍る思いであった。しかし、一方では、数年前に起きたゲリラによるハトシェプスト女王葬祭殿での50数名にもものぼる虐殺事件や観光バス襲撃事件などといった不安材料もたくさんあったが、われわれは早速外務省の海外危険度情報をはじめいろいろな情報を収集し、検討し、その結果実施に踏み切ることにしたのである。

最初にわれわれは、ロンドンの大英博物館に赴きエジプト室を見学し前知識を身につけた上でエジプトに乗り込むことにした。エジプトはわれわれの期待を裏切るものではなかった。とにかくすごい一言につきる。そういう中でわれわれは、最大のクフ王ピラミッドの内部にも入ることができたとし、彩色豊かな神殿や墓地などの壁画も目にすることができた。すべてが予想を越すほどの規模と内容を備えたものであり、ただ驚くばかりであった。一方では、われわれの特別バスに警護のため上着の下に自動小銃を着けた私服警察が同乗したり、また、ピラミッドや神殿などの各遺跡にもたくさんの警官が配置され、彼らはラクダに乗りポーズを作ったり、しつこいくらいにカメラの撮影や被写体を申し出たりして金を要求するなど、これもまた驚きの一つであった。

このようないろいろな思いを胸に帰国し、ほっと一息ついた9月11日に、あのニューヨークの同時多発テロが発生したという忌まわしいニュースである。数千人という多くの人命が奪われた。また、パレスチナ・イスラエル問題にも火が噴き、ますますエジプトへの旅が困難となろう。もう一度、このような心配のいらぬエジプト旅行ができる日が一日も早く来ることを願わずにはいられない。